



TITLE:

静脩 Vol. 53 No. 3(2016.10)[全文]

AUTHOR(S):

CITATION:

静脩 Vol. 53 No. 3(2016.10)[全文]. 静脩 2016, 53(3)

ISSUE DATE:

2016-10-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/217242>

RIGHT:

静学館

SEI-SHU

特集

ブックレビュー わたしの人生を決めた本

CONTENTS

- 02: ブックレビュー わたしの人生を決めた本
- 06: 教員寄贈図書
- 07: オープンアクセス方針説明会について
- 08: 図書館・室からのお知らせ

ブックレビュー わたしの人生を決めた本

京都大学の先生方も、今までにたくさんの本に出会ってられました。

その中にはさまざまなエピソードがあって、小さいころの思い出がある本、今のご自身の研究に影響をあたえた本などがあるようです。

学生のみなさんにもそんな本がありますか？ まだこれから出会うのでしょうか？

今号の特集では、4人の先生方にそんな本を紹介していただきます。

”サイエンティストとは”

『精神と物質：分子生物学はどこまで生命の謎を解けるか / 立花隆, 利根川進著・文藝春秋』

大学で天文学を専攻した私は、学位取得後、海外の研究機関を渡り歩いていました。縁あって米国テキサス大学の研究員となり、文字通り朝から晩まで研究を続けていました。それなりに充実した日々を送りつつも、次々と研究機関に就職していくかつての同級生を横目で見ながら、正直、焦りもありました。いつになったら日本に戻れるのか、自問する日々でありました。自分の学問に、もひとつ自信がもてなくて悶々としながらも、それでも必死になって切磋琢磨していました。そんな時、大学のアジア文庫でとっていた『文藝春秋』で、その記事に出会いました。

京大理学部出身の利根川進博士が、日本で最初のノーベル医学生理学賞を受賞された翌年のことです。立花隆氏が利根川氏をインタビューした記事を『文藝春秋』に連載していました。読み入りました。利根川氏の研究に関する強烈なメッセージを貪るように読み、大いに啓発され、そして励まされたのです。

- ・サイエンスでは二度目の発見なんて、意味がない。ゼロですよ。
- ・サイエンスで一番大切なのは、コンセプトの方のアイデアなんです。ここがわからない、ここが不思議だというところを、まず問題として定式化するところからはじまる。
- ・(サイエンティストの喜びとは) みんな知りたがっていることを自分だけが知っていて、それをみんなに聞かせてやるんだという満足感。
- ・何をやるかではなく、何をやらないかが大切だ。自分はこれが本当に重要だと思う、これなら一生続けても悔いはないと思うことが見つかるまで研究をはじめな。
- ・このチョウチョウでこうわかっていることを、別のチョウチョウについて調べるような実験はいやだ。

- ・人間の頭の容量なんてのはだいたいみんなきまっているから、記憶力がものすごくいい秀才タイプは、逆にひらめきみたいな能力に欠ける。(私は)記憶力も悪いし、そんなに頭がいい人間じゃない。だからときどき変なことを考える。そのほうがサイエンティストには重要なんだ・・・
(本文より引用、一部短く改変しています。)

この連載記事は、後ほど『精神と物質』というタイトルで出版されました。

京大で教えていて気づいたことは、自信をなくしている学生が意外と多いということです。きっと周りをみて「みな頭がいいなあ、自分はダメだなあ。」と落ち込んでいるのです。そんな学生たちに、この本に書いてあることを講義の中で話すことがあります。俗に言う余談です。「頭のいい人にはいい研究はできないと、あの利根川博士もいっておられる。自分は、頭がからっぽのところがあるから人のやらない実験をして、それがノーベル賞に結びついたんだと。だから他人と比較することをやめ、自信をもって自分の学問を追究しなさい。」

こういった話をする、それまでトロンとしていた学生の眼が急にらんと輝き始めるのです。真剣なまなざしで一斉にこちらをみるのです。不思議です。利根川博士の言葉は、今も研究・教育の両面において、私に力を与えてくれています。

嶺重 慎 みねしげしん
(理学研究科教授)

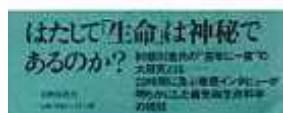
— 所蔵館・室 —
附属図書館

2F 開架 RA717.1 セ 40B

吉田南総合図書館

1F 和書 464.11S4

ほか



”『蝦夷地別件』から逃げられない”

『蝦夷地別件 / 船戸与一著；上・中・下・小学館，（小学館文庫）』

わたし程度の心の弱い人間であれば、人生の方向を変えることくらい容易である。だから、わたしを変えた本は多い。本を読み終わったあと、ふと見上げて広がる景色が、いつもより大きな心臓の鼓動とともにこちらに迫ってくる、なんて経験は結構多い。

しかし、わたし程度の記憶力の人間であれば、内容を忘れた本もやはり多い。そうになると、ここで紹介できる本は極端に少なくなる。大岡昇平の『野火』、カフカの『変身』、石牟礼道子の『苦海浄土』など、実際にほのかに甘いような苦いような味が舌に残るような読書体験はいまでも鮮やかに記憶されている。

船戸与一の『蝦夷地別件』も強烈だった。船戸のハードボイルドは、文字通り貪るように読んだ。ゲリラへの武器密輸、民衆の武装蜂起、秘密警察の暗躍など、闇社会を生きる人々の生と死を鼻に付くほどキザに、しかも悲惨に描く。彼の作品の登場人物たちは、しばしば、乾いた唇を腕で拭う。何ヶ国語も自由に操る。トヨタのランドクルーザーに乗る。急に性欲が暴走する。よく食べ、よく飲む。死ぬときにプツンと神経が切れる。船戸以後、わたしは、叙述の細部にこだわり始め、ハンドルをステアリング、お茶を「淹れる」と表記してみたりした。要するに憧れたわけだ。

なかでも、文庫で三巻本になる『蝦夷地別件』のスケールは半端ではない。近世のアイヌ部族の反乱と幕府による制圧を扱ったものだが、啓蒙期ポーランドの貴族が、バイカル湖までやってきてアイヌに武器を売るなんて、どうして想像できるのだろうか。船戸は歴史書を読みこなしただけで、物語を構想しているから、時代考証もしっかりとしている。

また、アイヌ部族のなかに入り込んできた優しい武士が、江戸幕府の間諜であることが徐々にわかるのだけれども、その「徐々に」わかっていく演出がにくい。『蝦夷地別件』もそうだが、争いとは、にらみ合う二者が戦うものではなく、第三者によって二者が戦わされるものである、というのが船戸与一の歴史観である。歴史の大きな歯車のなかに、若い人生をかけて権力に抗する人間の美しさを描

いて読者を麻痺させたあと、急に手のひらを返して、この人間は第三者の手のひらで踊っているにすぎないことを伝える。この残酷なフィナーレに、わたしはいつも酔いしれていた。鳥の眼、つまり社会科学的視点と、虫の目、つまり人文科学的視点の奇跡的な共存こそ、わたしの力不足をはっきりと意識させたあとに、何かを語る喜びを教えてくれたのである。

そして、『蝦夷地別件』以後、歴史学とは何か、という問いはわたしにとって重くなる。ユーラシア大陸をまたにかけるような世界史の想像力や、明日の仕事よりもいまの一行の牢屋に読者を閉じ込める文章の力を、歴史研究者は、どこまで得ようと修行してきたのだろうか。

昨年春、七十一歳で亡くなった。死の寸前で書き終えた『満州国演義』は、もったいなくて、まだ読めていない。

藤原 辰史 ふじはら たつし
(人文科学研究所准教授)



— 所蔵館・室 —

附属図書館

2F 開架 KH||165||エ1

”そこにうまく収まっていない私みたいな一冊”

『Edmund Spenser, *The Shepheardes Calender* (1579; rpt 1890)』

文学研究科・文学部が現在のモダンな建物に収まっている場所には、かつて煉瓦造りのいかにも旧帝大然とした建物があつた。その北西の角に、私がその本に出会った書庫があつた。文学科閲覧室、略して文閲は、哲閲、史閲とともに、古書の匂いに痺れる人間にとっての阿片窟だつた。教養部から文学部の英文科の学生となつて初めてこの薄暗い書庫に足を踏み入れたとき、私の頭には「我万卷の書を読まん！」という言葉が塔の鐘のように鳴り続けた。まさにそこには万、いや何十万の書物が、読まれるのをただ静かに待っているのだつた。

しかし、書庫に入り浸り、背伸びしてあれこれの洋書を借り出してはみたが、学部生の私がちゃんと読めた本は10冊あるかないか、といったところであつた。英語は高校生のころから大好きだつたし、大学の同級生の中でも劣っていたとは思わない。しかし私には「文学」が足りなかつた。卒論にモダニズム作家ジェイムズ・ジョイスの自伝的小説『若い芸術家の肖像』(1916)をとりあげたものの、批評的な視点は持ち合わせず、かといって創造的に意味をつけ加えるセンスもない私に、ろくな論文の書きようもなかつた。私が持ち合わせていたのは、それでもなお大学院に進学しようという勘違いだけだつた。

修士課程で何を研究すべきか、文学部の先生は決して示唆を与えない。大学院はそれが明確である人の来るところである、はずだつた。そうでない自分はここにいるべき人間ではない、という思いは卒論のころから増大する一方で、(実は今もまだちょっとそう思っている) そんな不安と劣等感を抱えて行けるところは、薄暗い書庫しかなかつた。英文学の書物の並ぶ棚の一つに、版型が少し大きいため周囲の本から背が飛び出している一冊、そこにうまく収まっていない私みたいな一冊を手にとり、開いてみる。

それは古い、といっても文閲の中ではそれほどでもない、19世紀末の本である。私たちが読めるローマンから、読みづらいドイツ語のようなひげ文字まで数種類の小さなフォントが使われていて、

ところどころに木版画が挿入されている。これは昔の英国の絵本なのだろう。子供向きの内容なら、フォントを覚えるという、文学センスを要しない努力さえすれば私にも読める、何か書ける、かもしれない。これも勘違いであつた。

その本は実は16世紀の本のファクシミリ復刻版(1890)で、オリジナルはエドモンド・スペンサー(Edmund Spenser)が匿名で出版した『羊飼いの暦』(*The Shepheardes Calender*, 1579)というパストラル(牧歌)である。木版画は、暦の12の各月に一枚ずつ付され、その月の季節にちなんだ話題が、羊飼いや牛飼いの対話の形で語られる。これが英国ルネサンス期の文学的ナショナリズムに火をつける作品であつたことや、その作者スペンサーは後に『妖精の女王』(*The Faerie Queene*, 1590-96)という長大な寓意物語詩を書いて時代を代表する詩人とみなされるようになったことなど、この本の意義は知る由もなかつた。羊飼いを登場人物とする牧歌は、しかし民衆の歌ではなく、ギリシャ・ローマ文学に起源する極めて自意識的な文学形式であることや、登場人物の身分の低さは時として反権力性をも帯びることも、後で知つた。ただ、冒頭と末尾、一月と十二月という寒い季節にスペンサーの分身ともいべき羊飼いきリンが登場し、憂鬱な面持ちで歌＝詩に別れを告げているのが気になり、そこから少しずつ論文らしきものを書けるようになったのだ。自分の論文で初めてメジャーな雑誌に載つたのも牧歌論であつた。

この本が今どうなっているのか、文学研究科の書庫へ会いに行つてみた。ところが、どういうわけか見つけることができなかったし、KULINE上でもヒットしない。紛失したか、廃棄されたのであろうか。あの出会いが幻であつたとはとても信じられないが、愛する文閲と、愛する『羊飼いの暦』が記憶の中で結びついてしまった可能性—限りなくゼロだとは思—を認めるしかないのだろうか。

水野 眞理 みずの まり
(人間・環境学研究科教授)

”リビングにあった科学事典”

『ライフ／人間と科学シリーズ・タイムライフブックス』

私の科学への芽生えは、小学生当時、全校集会での校長先生の話だった。校長先生は、しばしば南極の話をしてくれた。先生はどうも南極越冬隊員だったらしいと知り、図書室に行き、南極の本を調べてみると、巻末のリストに名前が載っていた。校長先生は医学・体育を専門とする第十次南極越冬隊員だったのだ。南極という未知の世界を、隊員であった先生の口から直接聞いたことは幸せであったが、同時に、図書室に所蔵されている本の活字として先生の名前が記されているという事実が、校長先生が話す南極、ひいては科学の話をより一等重要なものとして、私に感じさせてくれたのである。薄暗い図書室で本のページをめくりながら調べるワクワク感、そして情報（名前）を見つけた時の高揚感を、今でも忘れることができないし、ものを調べる喜びを知った原点である。

さて、私はどちらかというとテレビっ子であった。当時、一家にテレビが一台、家族が集うリビングに置かれるというのが普通であったし、その当時のお約束として、テレビの傍らにある本棚には百科事典や絵画全集が並んでいた。親兄弟がその事典を広げて読んでいるのを見たことがなく、子供ながらも、教養ある雰囲気醸し出すためのインテリアの一つ？とも感じていたが、その中に、アメリカの「ライフ／人間と科学シリーズ」という書籍の翻訳物が並んでいた。「宇宙への挑戦」や「時間の測定」、「数の世界」というタイトルが並ぶ25冊の大人向けの教養科学事典である。私にとっても、その事典はリビングのインテリアであり続けたが、中学生の頃、ふと、手に取ってみた。内容は小難しい感じがしたが、大きな図版とカラー写真が象徴的に、また数多く使われ、視覚的に情報を伝えてくれるものであったため、テレビっ子の私にも抵抗なく、少し背伸びをする感じで読むことができた。いつの間にか、この本を読むためにリビングにくるのが常となっていた。何度も何度も読み返したこの事典は、自分が科学というものに興味があることを確信させてくれた。特に、この事典には多くの科学者が登場したこともあり、科学は単なる知識ではなく、人間が一生をかける

に値するものであると感じたのである。

引っ越しをしたこともあり、いつの間にかこの事典は手元から無くなってしまっていたが、昨年、偶然この事典が古本屋で売られているのを知り、懐かしさもあって購入した。そして、かつてそうであったように、リビングの本棚に並べてみた。それから約一年がたち、いまだ子供たちがこの本を手にした形跡はない。まあ、それでも良いのだ。読まずのではなく、読めるようにリビングに並べておくのだ。ふとしたきっかけで自ら本を手にし、面白いと気づくことこそ、本当の興味につながると思っている。

ここまで書いて、ようやく気づいた。自分の親も同じ事を考えていたのではないか。今の今まで、親がインテリアとして事典を並べていたと思っていて済みません。そして、科学って面白い、と自分で気づいたように思わせてくれて、ありがとう。

高橋 良和 たかはし よしかず
(工学研究科准教授)



— 所蔵館・室 —

附属図書館

B2 書庫 6-40|| ス||99

吉田南総合図書館

B1 書庫 700|||421

ほか

教員寄贈図書

受入期間：2015/4/1 ～ 2016/9/30 寄贈受入順（敬称略）

所属部局	寄贈者氏名	寄贈図書名	出版社	出版年
工学研究科	神吉紀世子	Borobudur as cultural landscape : local communities' initiatives for the evolutive conservation of Pusaka Saujana Borobudur	Kyoto University Press	2015
人文科学研究所	田中雅一	軍隊がつくる社会：社会がつくる軍隊 1-2（科学研究費補助金（基盤研究(B)）；平成20-23年度）	京都大学人文科学研究所	2012
人文科学研究所	大浦康介	日本の文学理論：アンソロジー	京都大学人文科学研究所	2015
名誉教授	高橋正三	頭字語事典 改訂版	蒼穹社	2015
アフリカ地域研究資料センター	梶茂樹	A Runyoro vocabulary	Shoukadoh（松香堂）	2015
文学研究科	根立研介	美術史における転換期の諸相（科学研究費補助金基盤研究(B)研究成果報告書；平成23-26年度）	根立研介	2015
人間・環境学研究科	廣野由美子	英国小説研究 第25冊	英宝社	2015
名誉教授	芦阪直行	成長し衰退する脳：神経発達学と神経加齢学（社会脳シリーズ8）	新曜社	2015
名誉教授	狭間直樹	中国近 現代論争年表：A chronology of the intellectual disputes in modern and contemporary China from 1895 to 1989 (Chinese version)	中国文联出版社	2005
人文科学研究所	石川禎浩	現代中国文化の深層構造（京都大学人文科学研究所附属現代中国研究センター研究報告）	京都大学人文科学研究所	2015
高等教育研究開発推進センター	溝上慎一	どんな高校生が大学、社会で成長するのか：「学校と社会をつなぐ調査」からわかった伸びる高校生のタイプ	学事出版	2015
名誉教授	川崎良孝	アメリカ強制収容所における日系人の図書館：1942-1946年	京都図書館情報学研究会	2015
教育学研究科	福井佑介	図書館の倫理的価値「知る自由」の歴史的展開	松籟社	2015
地域研究統合情報センター	de Jong, Wil	Sociedad Bosquesina 1-2	CIAS（京都大学地域研究統合情報センター）	2011
生態学研究センター	酒井章子	Pollination ecology and the rain forest : Sarawak studies (Ecological studies : analysis and synthesis v.174)	Springer	2005
白眉センター	西山雅祥	High pressure bioscience : basic concepts, applications and frontiers (Subcellular biochemistry v.72)	Springer	2015
人間・環境学研究科	廣野由美子	プロンテ姉妹と15人の男たちの肖像：作家をめぐる人間ドラマ（MINERVA歴史・文化ライブラリー 27）	ミネルヴァ書房	2015
名誉教授	高田時雄	中国語音韻史の研究・拾遺：尾崎雄二郎（映日叢書 第二種）	臨川書店	2015
名誉教授・元総長	尾池和夫	中国的地震 预报	中国社会科学出版社	2015
学術情報メディアセンター	上田浩	Wiresharkパケット解析リファレンス：Network Protocol Analyzer	ソフトバンククリエイティブ	2009
名誉教授	川崎良孝	アメリカ図書館協会『倫理綱領』の歴史的展開過程：無視、無関心、苦悩、妥協	京都図書館情報学研究会	2015
名誉教授	祖田修	近現代農業思想史—从工业革命到21世紀	清华大学出版社	2015
名誉教授	森田雄平	ダイズのポストゲノミックス(大豆蛋白質 2)	西村信天堂	2015
人間・環境学研究科	河崎靖	ボンヘッファーを読む：ドイツ語原典でたどる、ナチスに抵抗した神学者の軌跡	現代書館	2015
人間・環境学研究科	河崎靖	ゲルマン語基礎語彙集	大学書林	2015
名誉教授	芦阪直行	ロボットと共生する社会脳：神経社会ロボット学（社会脳シリーズ8）	新曜社	2015
人間・環境学研究科	廣野由美子	謎解き「嵐が丘」	松籟社	2015
名誉教授	中川久定	L'Esprit des Lumières en France et au Japon	Honoré Champion	2015
再生医科学研究所	高橋恒夫	人類に問う：未来医療はどうあるべきか = A question for humanity : what future do we envision for medical care?	ローズレインボーの会 書籍部：城門書院	2015
アジア・アフリカ地域研究研究科	木本幸憲	やりとりの言語学：関係性思考がつなぐ記号・認知・文化	大修館書店	2015
名誉教授	吉川榮和	発電工学 改訂版（電気学会大学講座）	電気学会	2015
人文科学研究所	菊地暁	ライフヒストリーレポート選 2015	京都大学民俗学研究会 （京民会）	2016
名誉教授	柴田俊忍	材料力学の基礎	培風館	1991
名誉教授	鈴木仁美	化学実験の事故事例・事故防止ハンドブック	丸善出版	2014
工学研究科	吉崎武尚	Helical wormlike chains in polymer solutions. 2nd.ed.	Springer	2016
高等教育研究開発推進センター	溝上慎一	アクティブラーニング・シリーズ 1-7	東信堂	2016
文学研究科	大概信	高山寺典籍文書総合調査団研究報告論集 平成27年度	高山寺典籍文書総合調査団	2016
名誉教授	川崎良孝	マイノリティ、知的自由、図書館：思想・実践・歴史	京都図書館情報学研究会	2016
防災研究所	小野憲司	大規模災害時の港湾機能継続マネジメント：BCP作成の理論と実践	日本港湾協会	2016

所属部局	寄贈者氏名	寄贈図書名	出版社	出版年
人文科学研究所	池田巧	名詞句の構造(シナ=チベット系諸言語の文法現象 1)	京都大学人文科学研究所	2016
名誉教授	竹本修三	日本の原発と地震・津波・火山	マニュアルハウス	2016
名誉教授	狭間直樹	梁啓超：東アジア文明史の転換	岩波書店	2016
人文科学研究所	村上衛	海洋史上的近代中国：福建人の活動と英国、清朝の因応	社会科学文献出版社	2016
人文科学研究所	小川佐和子	映画の胎動：1910年代の比較映画史	人文書院	2016
名誉教授	志岐常正	現代の災害と防災：その実態と変化を見据えて	本の泉社	2016
名誉教授	川崎良孝	アメリカ図書館協会の知的自由に関する方針の歴史	京都図書館情報研究会	2016
名誉教授	山田慶兒	중국의학의기원 (中国医学の起源) 韓国語訳	수퍼노바	2016
名誉教授	礪波護	隋唐佛教文物史論考	法蔵館	2016
名誉教授	礪波護	隋唐都城財政史論考	法蔵館	2016

この一覧は附属図書館への寄贈者著作のみの掲載となっております。また、所属部局は寄贈時のものです。

上記以外にも多くの図書を各図書館・室にいただきました。今後とも蔵書充実のためご寄贈いただきたくよろしくお願いいたします。

オープンアクセス方針説明会を各研究科・学部で開催しています

2015年4月28日に採択された「京都大学オープンアクセス方針」に関する説明会を、各研究科・学部等に出向いて開催しています。それぞれの会場に合わせて内容を調整し、ポイントを変えながら説明しています。これまでの説明会では、例えば、こんな質問がありました。

Q. お金を払って掲載誌上でオープンアクセスにした論文も対象になりますか。

A. なります。「京都大学オープンアクセス方針」は京都大学学術情報リポジトリ：KURENAIでオープンアクセスにする方針なので、掲載誌上でオープンアクセスにしたものも対象になります。

Q. オープンアクセス方針に従って KURENAI に登録した論文は、京都大学以外の人も見ることはできますか。

A. できます。インターネットの環境があれば、世界中どこからでもどなたでもご覧いただけます。

Q. KURENAI への登録を出版社が認めているかどうかは、自分で確認する必要がありますか。

A. 図書館が確認いたします。

今後も各研究科・学部で開催をいたします。教職員向けの回が多いですが、学生の方に参加いただける回もありますので、ご興味のある方はぜひご参加ください。

ー 京都大学オープンアクセス方針の内容や説明会の情報はこちら ー

<http://www.kulib.kyoto-u.ac.jp/content0/13092>





図書館・室からのお知らせ

■京都府内の公共図書館から本を取り寄せることができます

附属図書館を受取・返却の窓口として、送料無料で、府内の公共図書館から本を取り寄せられるサービスを開始しました。利用できるのは京都大学にご所属の方で、同時に取り寄せできる冊数は1人1冊、取り寄せの所要日数は1週間程度です。お申込みは「MyKULINE」からどうぞ。詳しい利用方法は、次をご覧ください。

http://www3.kulib.kyoto-u.ac.jp/guide/jpn/guide_jp_kyotoprefectureill.html



本サービスは2017年3月までの試行として実施しています。なお、従来の郵送による取り寄せサービスも選択できます。

■学部図書館・室で後期試験期の開館時間の延長（試行）を予定しています

学生の皆さんの自学自習環境の向上を目的として、今年度後期試験期に、開館時間の延長を予定しています。延長を実施する図書館・室と時間は、後日、図書館機構ウェブページ等でご案内します。

■本を巡るイベントが開催されています

新たな本を手にするきっかけとして、図書館に足を向けてみませんか。

・吉田南総合図書館では、12月28日（水）までの間、「BOOK BINGO」を開催中。様々な分野の本を借りて、ビンゴカードを埋めていくと特典がプレゼントされます。

<http://www.kulib.kyoto-u.ac.jp/bulletin/1372256>

・経済学部図書室では、資料展示「京都の企業について知ろう」が11月30日（水）まで行われています。各社の社史を中心とした企業関連資料が展示されています。

<http://www.kulib.kyoto-u.ac.jp/bulletin/1372381>



■附属図書館の書庫入口に入庫ゲートを設置しました

学生証等を預けることなく、書庫へお入りいただけるようになりました。入るときは、学生証等(ICカード)をかざすか、図書館利用証(磁気カード)をスライドさせるとゲートが開きます。出るときは、ゲートに近づくと自動で開きます。なお、かばん等の荷物がある方は、従来どおり書庫入口のロッカーに入れてください。

■再生医科学研究所図書室の閉室について

2016年9月末日をもって、再生医科学研究所図書室は閉室しました。

■静脩 Vol.53 No.2 に掲載した「京都大学図書館統計」の一部に、次のとおり誤りがありました。お詫びして訂正いたします。

訂正箇所：8ページ「全学の貸出冊数」のグラフ

誤) H26：471,723 正) H26：476,284

京都大学図書館機構報「静脩」(ISSN 0582-4478)

Vol. 53 No. 3 (通巻 191 号) 2016 年 10 月 31 日発行

編集：「静脩」編集小委員会(責任者：附属図書館事務部長)

発行：京都大学図書館機構

京都府京都市左京区吉田本町 36-1

TEL 075-753-2613

URL <http://www.kulib.kyoto-u.ac.jp/>

表紙題字：附属図書館所蔵 西園寺公望公揮毫

今月の表紙

今回の特集記事に登場する文学研究科図書館書庫の一角です。

当時とは違っているとはいえ、雰囲気は感じていただけるかと思います。ちなみに、文学研究科の先生でさえ迷うこともある「地下迷宮」だそうです。

